
囚人ゲーム

カカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

囚人ゲーム

【Nコード】

N6537Y

【作者名】

カカ

【あらすじ】

上坂はどんどん近づいていく。「囚人ゲーム」へと。

第一章 主人公を待つもの

人の気配がない山奥に、黒塗りの自動車が行進していた。

その先頭を走る車の後部座席に、その男はいた。

上坂真二。髪は黒色で、まとまっている。切れ長で大きな目。モデルのような体。人目を引くその外見だが、ところどころにアザがある。連れてこられるときに、争った後だった。

手足は縛られており、口はふさがれていた。

舗装されていない山道に車が大きく跳ねる。その振動で、アテルが目覚ます。

「ん、ううん」

目をゆつくりと開けるアテル。その瞳は漆黒と表現できるような、まっすぐな黒色だった。

「ん、」意識がはつきりしてきた。目を完全に開く。

「んーんーんー」

口をふさがれているので、言葉にならない。

運転をしている黒服の男が上坂に気づく。

「気がついたか、上坂真二。静かにしている。もうすぐ目的地に着く。」

状況がまったくつかめない上坂。

どこだここは？確か、そうだ。黒服の男がいきなりやってきて俺を。

23時間前、夜10時。

上坂がいた刑務所の消灯時間。いつもと同じように囚人は牢屋に入られ、鍵が閉められる。

上坂の牢屋の鍵も閉められた。

「はー今日も疲れた。もう寝るか。」

何事もなかったように独り言をつぶやき、ベットに倒れこむ。

30分後。上坂はまだおきている。ベットから顔を上げあたりを確

認する。物音ひとつしない。

全員寝たみたいだな。心の中でつぶやく上坂。

上坂は素早く体を起こし、牢屋の右上隅から左に3つ下に2つのところの石畳に向かう。

慣れた手際で石畳をはずしていく、石畳がはずれるとそこにはそこが見えない空洞があった。

上坂はそれを満足そうに見つめ、音が立たないように石畳を慎重に置く。

空洞からはわずかな風が吹き抜けてくる。外とつながっているようだった。

上坂がやろうとしていること、もうお分かりだろう。

それは・・・脱獄だった。

いざ穴へと飛び込むとする上坂だったが、足が止まる。

カッーン、カッーン。上坂の耳に聞こえてくる、これは足音。

まずい、上坂は反射的に動く。石畳を素早く戻し、ベットにもぐりこむ。

足音は次第に大きくなってくる。上坂の緊張も高まる。

足音から察するに、だいぶ近くにいます。緊張の中上坂には疑問が浮かぶ。

まだ10時35分くらいのはず。巡回は1時間ごとに行うはずなのに？まさかばれたのか。

さらに緊張が高まる。足音の主はついに上坂の牢屋にまで来た。

過ぎろ、過ぎろ、通り過ぎてくれ。上坂が願う中5秒経過・・・足音がピタリとやんだ。

さらに数秒の沈黙。上坂の緊張が最高潮に、心臓は破裂しそうだった。

後ろからジャラジャラ音がする。

何をしているんだ？

振り向こうか、振り向くまいか迷っている時、きいいと音がする。まるでドアを開けるときのような音だ。

ドアを開ける？まさか、と思い上坂が反射的に振り向いた途端、ハンカチのようなものに当てられた。

抵抗するが、意識が薄れていく。

くそ、くそ、やっと脱獄ができるって時に。外に出て復讐をしようってときに。

上坂が最後に頭に浮かんだのは、刑務所に流れていたあのうわさだった。

意識は完全になくなり上坂は眠りについた。

そこで記憶は途切れている。

俺は、あのうわさのとおり、刑務所から連れてこられたのか？

上坂が考えていると、車が止まっていた。どうやら目的地とやらについたようだった。

後部座席のドアが開けられる。開けたのは運転していた黒服の男。

「降りろ。」

黒服の男が短く命令する。

上坂は仕方なく命令に従う。車を降りて上坂が最初に目にしたのはとてつもなく大きな豪邸だった。

よく敷地の広さを東京ドームで例えられるが、これを東京ドームで例えるとなると、

東京ドームを20個並べた広さに、縦に5個並べたような大豪邸だった。

ここでカクレンボしたとしても3日かけても見つけられるか分らない。

呆然と眺めていると、黒服の男が縄を引っ張りながら、豪邸のほうとは別の方角に歩き出す。

ん？縄、見れば縄の先には上坂の首が繋がれていた。当然、上坂は黒服の男に引っ張られる。

いつの間に。上坂が思った瞬間、黒服の男は縄を容赦なく引っ張る。

上坂の首が前に引っ張られる。上坂の体が宙に浮いた。体が引きずられる。

「いててて、痛い、痛い。おいストップ、ストップ。止めるー」

上坂が絶叫する。

黒服の男は上坂のほうを見ようともしない。縄を引っ張る力を緩めようともしない。

「痛い痛い、いた、もうやめろー」

上坂は、引っ張られる力を利用し前方倒立回転する。上坂はうまく体勢を整える。

引きずられることなく、黒服の男と同じように歩いてついていく。黒服の男に追いつき肩を掴み取る。上坂は腕を引き、黒服の男をこちらに振り向かせる。黒服の男の胸倉を掴み取り、怒りと疑問をぶつける。

「てめー、ふざけんなよ。人を物みてーに引きずりやがって。だいたいここはどこなんだよ。

何で俺をこんなところに連れてきやがったんだ。もう少しで、もう少しで」

上坂はその先を言うことができなかつた。上坂の胸の辺りから、高圧電流が流れてきたからだ。

「がっ」

思わず倒れこむ上坂。

「ふう」

黒服の男が短くため息をつき、上坂の頭をつかみ取る。そして、倒れている上坂の頭を上げ、瞳を覗き込む。

「ふざんけんなよ、くそが。いつぺんに話すんじゃねーよ。質問なら後で聞いてやるよ。

今は黙ってついてくればいいんだよ。」

そういつて上坂の頭を離して、上坂を見下ろす。

「後お前はここに連れてこられた時点で、人じゃねー。物だ。覚え

とけ」

上坂は顔を上げる。黒服の男と目が合う。黒服の男の目は、人を見ている目ではなかった。

「くっ」

だいぶ楽になつてきた上坂は立ち上がる。

それを見た黒服の男は、何も言わないまま何事もなかったかのように歩き出す。

縄で引つ張られているので上坂も歩き出す。

ちっ、なんなんだよ、こいつ。何が物だ。馬鹿にしゃがつて。それに俺の体からなんで電流が？

そう思いながらしばらく歩いていると、ヘリコプターがそこにあつた。

黒服の男はヘリコプターの運転席に乗り込み、縄で上坂を後部座席に乘らせる。

ヘリコプターのエンジンがかかる。ゆっくりとあがつていく。黒服の男が話しかけてくる。

「今なら質問に答えてやる。3つまでな。」

上坂は迷うようにためらいながら、疑問を3つぶつける。

「まず、どうして俺がここに連れてこられたんだ。

それに、ここはいつたいどこなんだ。

お前は誰なんだ。

黒服の男は無表情で淡々と答える。

「お前にはあるゲームに参加してもらつたため。

ここは、私の雇い人の前田様のお屋敷。

私はただ雇われただけの人間だ。

「ゲームって何のことだ、それに前田って」

上坂の言葉が詰まる。黒服の男が銃口を上坂に向けていたからだ。

「質問は3つまでだ」

「ちっ」

上坂は舌打ちする。言えなかったことを心の中でつぶやく。

前だつて言えば、日本で一番の大富豪つて言われるあの前田か？それに何でヘリコプターなんか。

その答えはすぐに解けた。ヘリコプターから外を見ると、それは迷路だった。一度入ったら二度と出られないような複雑な迷路。上から見てもまったく分からない。

それからしばらくするとヘリコプターは豪邸の前で着陸した。

上坂と黒服がヘリコプターを降りる。黒服の男は、

「中に入れ」

とだけ、短く言い豪邸の扉を開けさつさと中へ入っていく。

上坂はおかしなことにきずく。

「あれ、引つ張られない？」

自分の首を見てみるといつの間にか縄が外れていた。

「いつの間に。」

上坂はゆつくりと歩いていき、扉の前に立つ。

上坂は悟っていた。この中に入ったらもう後戻りができないこと。

黒服の男が言っていたゲームが命に

かわること。そして、復讐を果たすためにはこの中に入らなければいけないこと。

上坂は意を決して扉に手をかける。一度大きく息を吸い込み手に力を込める。

上坂は中へと入っていく。

「囚人ゲーム」が始まろうとしている。

第二章 囚人ゲーム開始！！

手に力を込める。扉がゆつくりとあいていく。

上坂の目にまばゆい光が差し込む。突然の光に目がくらむ。光に慣れた目をゆつくりと開ける。

上坂は絶句する。

「・・・すげえ。」

ようやく搾り出した言葉がこれだ。上坂の目に映るのは、当然のごとく豪邸の中身。

当たり前にあるシャンデリア、大理石のテーブル、見たこともないような豪華な料理。

いつていつたらきりがない。とにかくスケールが違う。

その中にいる無数の人々。豪邸にまったく似合わない風貌をしていた人々。

質素な服を着こなし、料理にも手をつけず、険しい顔をしている。

緊張しているのか、ぴりぴりしているようだ。

上坂の横から誰かが近づいてくる。見ればさっきの黒服の男。

「上坂、これを着ろ。」

黒服の男から渡されたのは質素な服だった。

「もうじき、前田様からゲームの説明がある。さっさと用意をしろ。」

「おい、いい加減に教えてくれ。ゲームってのは言いたい何なんだ？」

黒服の男がため息をする。

「ゲームというのは囚人だけで行われるゲーム、いわば囚人ゲームだ。」

「囚人だけが行われるゲーム？」

もう用は済んだという風に、黒服の男がさっさと立ち去っていく。

「お、おい待て。」

黒服の男は、上坂の呼びかけを無視していつてしまう。

「ちっ」

近くにいたウエイトレスにトイレの場所を聞く。トイレで着替えをする。着ていた囚人服はどうしようもないのでその場に脱ぎ捨てておく。上坂はトイレを後にする。

上坂は目の前の階段を下りて行き、料理のある広場に向かう。

その間に何人かの男たちとすれ違う。男たちはこちらをにらんでくる。まるで狂犬だ。

吼えてくる犬の群れの間を裸で通るような感覚だ。

だがこの感覚は上坂に恐怖より確信を与えていた。

この感覚間違いない。こいつら全員囚人！

それは上坂がまだ刑務所にいたところと同じ感覚だった。囚人の間を通るたびに、囚人がにらんできた。

しかし、囚人が全員そんな凶暴なわけではない。おとなしい囚人も何人かいた。

囚人の全員が上坂をにらんでくるのには理由があった。

上坂が刑務所に入れられたころのこと。

「俺じゃない。俺がやったんじゃないんだ。信じてくれ。」

ひとつの牢屋から泣き叫ぶ声が聞こえる。

「うるせー。静かにしろ。」

隣の牢屋からの怒鳴り声。

泣き叫んでいるのは服役したばかりの上坂だった。

このころの上坂にはひとつのあだ名があった。

「ったくうるせーよな。アテルのやつ。」

アテル（虚言者）。刑務所に入れられた囚人が自分の罪を認めないことはよくあることであつた。

しかし、上坂はそれが特に強かつたのでつけられたあだ名であつた。囚人はいつまでも罪を認めない上坂を毛嫌いしていた。

しかしそのうち、誰もが上坂のことを相手にしないようになり、あ

だ名も呼ばれることはなくなったていった。

上坂の肩が一人の男とぶつかった。

「あ、悪い。」

上坂が謝る。

ぶつかった男は何もいわずに去っていった。

「無愛想なやつ。」

囚人とはひときわ違う雰囲気を持った男だ。

突然天井の光が消えた。それと同時にスポットライトがつけられる。そのスポットライトを浴びながら、一人の男が階段を下りてくる。

上坂にはその顔には見覚えがあった。新聞やテレビで見たことがある。

恐らくこの男は、

「やあ諸君、よく集まってくれた。私が前田金治だ。」

下りてきた男、いや前田金治が囚人に向かって話しかけてくる。

上坂は背中に寒気を覚えた。

なんだ？前田の声を聴いた瞬間からだの毛が逆立つ。前田とは初対面のはず。体が警告する。

まさか、この男は・・・

「早速だが君たちにはひとつのゲームに参加してもらおう。聞いているものもいると思うが、参加してもらうゲームは囚人ゲームだ。」

囚人たちの間に波紋が広がる。囚人たちが声を上げる。

「ふざけるな。」 「俺たちを解放しろ。」 などなど。

「しゃべるな」

前田の静止。

「君たちに質問する権利はおるか、しゃべる権利もない。次口を開いたものは死んでもらう。」

前田が死刑宣告をした瞬間、囚人たちの周りを黒服の男たちが取り囲んだ。

黒服の男たちは全員機関銃を持っていた。

囚人たちの口が固く結ばれる。

「結構。続きを話そう。囚人ゲームとは君たち囚人の命をかけたゲームだ。勝者は一人。勝った者には罪をすべて消し、刑務所から釈放してやろう。それだけではない。勝者には1000万円を授けよう。生活の援助金のつもりだ。」

囚人たちに歓喜の声が上がる。

「しかし負けたものには、死んでもらうことになる。」

歓喜の声がやんだ。

「ふざけんな。なん・・・」

どどどどど、銃声が鳴り響く。怒鳴ろうとしていた囚人は後ろの黒服の男に撃たれ絶命した。

前田は何事もなかったように話を始める。

「君たちにはこれから前にあるこの3つの白い箱から一枚ずつ紙を引いてもらう。」

そういつて白い箱を取り出す。

「この箱にはそれぞれ君達が獲得できる、武器・金・アルファベットが入っている。」でわ一人ずつ引いてもらうおう。」

数10分後

上坂が引いたカードは次の3枚。

武器〃は、金〃さ、アルファベット〃ABであった。

何だこれ？アルファベットはわかるが、武器と金が意味不明だった。「諸君、武器と金はこの場でわかると面白くないので、わからないようにさせてもらった。諸君はこれからそれぞれのスタート地点へ移動してもらう。武器と金はそのにおいておく。アルファベットが示すものは、君達の仲間だ。囚人同士でペアを組んでもらう。相手もスタート地点へ行けばわかる。ゲームのルールについてだが、君達には特殊なケータイを渡しておく。そこにルールはすべてのついている。さらにこのゲームをもっと面白くしてくれる特典を多数つけておいた。それには諸君らが自分できづいてもらうしかない。では

以上だ。」

前田は説明を済ませ階段を上り去っていく。

上坂は頭が混乱していた。

ペア？特典？ケータイ？

何がなんだかわからなくなってきた。顔を上げるとほかの囚人が目に入る。

どの囚人も難しい顔をしていた。上坂と同じように頭が混乱しているのだろう。

周りを囲んでいた黒服の男の一人が前に進み出る。

「これから貴様達を各自スタート地点に連れて行く。乗ってきたヘリコプターに乗り込め。」

上坂を含む囚人達は、ヘリコプターに乗せられ前田家の豪邸を離れていく。

上坂のヘリコプターは5時間ほど飛び、どこかの港へ降り立った。

明かりのない港は暗闇だ。

そんな暗闇の中にひとつの人影が見える。ヘリコプターは上坂を降ろしどこか飛び去っていく。

港に人影が二つ。二つの影の間に4つの箱が置かれている。

二つの影は箱へと向かって行き近づいていく。

互いの顔が見える距離になるまで近づいた。

相手のほうから声をかけてくる。

「初めまして。僕の名前は伊藤海斗^{いとうかいと}。よろしく。」

海のほうから太陽が昇ってきた。日の出だ。

「・・・俺は上坂真二。」

囚人の命を懸けた囚人ゲームの開始が告げられた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6537y/>

囚人ゲーム

2011年11月23日14時56分発行